

那須山麓地域の酪農

おか だ りん し
岡 田 建 史

栃木県には、農業生産に関して全国に誇れるものがたくさんある。米、麦、野菜、花、果樹、和牛、酪農といずれもトップクラスである。特に、県北では、米、和牛、酪農が多く、我が那須山麓地区は、北海道、岩手県に次ぐ酪農地帯を形成している。私が牛乳を出荷している那須山麓酪農業協同組合連合会は、会員農協を8つ持っている。その下に生産者が350戸おり、日量215トン、年間約78,000トンの牛乳を生産している。

酪農経営は、昭和43年度の農林漁業金融公庫の総合資金の創設によって、長期で資金が借りられるようになってから、急速に大型化が進んだ。また、米の生産調整が始まり、水田転作に伴う乳牛の導入があり、特に、昭和50年前後に増加した。昭和50年代後半ともなると、牛乳の過剰生産により、牛乳にも生産調整が始まり、酪農をやめ他産業へ転換する人も出てきた。昭和60年頃から、100頭クラスの酪農家が増え、100頭の酪農家ともなると、特に合理化され、農機具、牛舎などの大型化が図られるとともに、搾乳が、一度に10頭、20頭分できる機械が導入された。また、飼料の給与についても、TMRミキサーワゴンにより全自動化が進みつつある。

昨年の夏にオランダから1台輸入した全自動搾乳機が、注目されている。多頭化が進み、労働時間の短縮が問題となっている中で、全自動搾乳機の出現により、人の手をかけなくてもよい分借金が増え、一層の金融管理が必要となっている。このような状況下で、現在30頭から50頭ぐらいの酪農家が、後継者も含めて大型化への道を進んでよいかどうかを模索している。多頭化すれば設備などで多額の借入れができるので、途中で後戻りはできないと考えている。

これらのことでネックとなるのは、①建築資材、農機具の高騰、②飼料の購入、自家生産、③たい肥、④総合農協の大型合併の四つの点である。

①の建築資材については、日本では、建築基準法により、畜舎も住宅、ビルディングなどと同じような基準で考えられている。諸外国と同じように、畜種にあったような畜舎の設計や建築基準があってもよいと思う。また、農機具についても、今の農家の人たちは、諸外国での現地価格を知っているので、流通の見直し等により適当な価格で販売されるようにすべきである。②の飼料については、大型化が進むにつれて、購入飼料への依存が高まり、自作地の作付けは簡素化する。冬作イタリアン系、夏作デントコーンを無理して同じ畑に2度作付けすることはしなくなる。いずれかの空いている時期にたい肥の置き場になるようである。③のたい肥の問題として、大型化するにつれて、ハウスでの乾燥か、大きなたい肥舎での良質たい肥化のいずれかの方法をとることとなる。しかしながら、双方ともコストが高く、また、この地区では畜産農家が多くて、十分な販路が見つけられずたい肥は収入にはならないので、どうしてもその処理は二の次となり、畑に積んで置くようになる。④としては、総合農協の合併が進んでいる中で、私たちの組合は、350戸からなる酪農専門の連合会であるが、総合農協が合併することになれば、その大きな農協組織の下に入ることとなり、専門的な技術者、よい指導者がいなくなるとともに、上層部の人たちと十分なコミュニケーションが図れなくなるおそれがある。酪農部分は専門農協にすべきであり、得失をよく見極めて対応していくべきであると思う。

いずれにせよ、自分たちの生産性を高め、不要のコストを削減して消費者に安価で安全性の高い食料を届けていきたいと考えている。

(栃木県那須町 農業)